平成29年度　第１回函館の教育のあり方検討協議会　会議録

日　時	平成２９年5月１１日（木）１８：３０～２０：０２
場　所	函館市南北海道教育センター大会議室
出　席	委　員　田　中　邦　明（北海道教育大学函館校教授） 大　場　みち子（公立はこだて未来大学教授） 齊　藤　　縁（北海道教育大学附属函館幼稚園副園長） 山　田　幸　俊（函館市小学校長会会長） 中　島　　悟（北海道高等学校長協会道南支部長） 絹　野　重　治（函館市社会教育委員） 竹　内　正　幸（函館商工会議所事務局長） 井　上　実　香（公募） 事務局　木　村　雅　彦（学校教育部長） 佐　藤　聖智子（生涯学習部次長） 寺　本　公　彦（学校教育部学校教育課長） 柴　田　　成（学校教育部学校再編･計画担当課長） 町　谷　仁　志（生涯学習部スポーツ振興課長） 小　松　将　人（学校教育部教育指導課指導主事） 村　上　貴　洋（学校教育部学校教育課主査） 松　本　　大（学校教育部学校教育課主事）
欠　席	委　員　毛　利　繁　和（函館市中学校長会会長） 中　村　和　代（函館市ＰＴＡ連合会事務局員）
傍　聴	２名

１　開　会

出席者８名。過半数を超えているため，会議成立。

２　議　事

（１）函館市教育振興基本計画の基本的方向性について

（田中会長）

それでは，議事を頂戴いたしました。これから次第に従いまして進めてまいりたいと思います。本日は６時半からスタートでございますが，１時間半ほど頂戴したいということで，８時くらいを終了の目標にしたいというふうに考えております。どうぞご協力をお願いしたいと思います。

それでは早速ですけれども議事に入りたいと思います。まず，議題１の函館市教育振興基本計画の基本的方向性についてでございます。前回，協議会では，函館の教育が目指す人間像，これについてかなり突っ込んだ議論をしてまいりました。そして，それを実現するための基本的方向性について，人間像を実現するために必要となるものを，縦が自立・共生・創造，横が資質・能力，環境という２つの視点で検討してまいりました。

そこで，本日の協議の内容でございます。

資料２，我々の議論の結果を書面として簡潔にまとめた函館の教育が目指す人間像でございます。これも随分，私ども前回議論をして，修正いただきましたが，これを確認することでございます。

それから，資料３の基本的方向性でございます。本日初めて出てきたもので，基本目標というものがございますが，この基本目標をまとめることでございます。

本日はこの２点，資料２の人間像を確認していくということと，それから太字で書かれている資料３の基本目標，ここだけはきっちりと決めていきたいというふうに思います。

それでは，事務局から資料について詳しく説明をお願いしたいというふうに思います。

≪事務局より，資料１，資料２，資料３について説明≫

（田中会長）

それでは，今日の１番目の課題でございます。資料２ですね。函館の教育が目指す人間像，これについて確認をしてまいりたいと思います。

まず，前回からの修正点をもう一度確認してもらうことはできますか。

（事務局）

自立につきましては，前回，自主的に学び，個性・能力を伸ばし，主体的に判断して変化する社会を生きる人というものになっているところ，「主体的に」という部分と「自主的に」という部分が語彙的に重複する部分もございますので，生涯学習を意識しまして，生涯を通じて学び続け，と資料２にあるとおり若干の変更を加えております。

また，共生につきましては，寛容と思いやりの心をもって，多様な人々との絆を結び，ともに支え合う人となっているところ，ここは変更ないものでございます。

創造につきましては，函館を愛し，世界に目を向け，新たな価値を創り，まちの魅力を高める人と当初していたところ，函館を愛しというところを基本目標でしっかりと函館への愛着や誇りというところに謳うことによって，この部分を世界に目を向け，新たな価値を創り，まちの魅力を高める人と，言葉の数もだいたい自立・共生・創造とも揃うように，若干の整理をさせていただいたところでございます。以上でございます。

（田中会長）

前回の論点は，自立の「主体的・対話的で深い学び」，ここに落ち着いたということですよね。「自主的に学び」という，そういった放っておいて学んでもらうというようなところは，すっかりなくなったということでございますね。

それでは，皆様からご意見を頂戴したいと思いますが，前回，大場委員がご欠席されておりましたので，たぶん一番フレッシュにこの文面をご覧になれると思いますので，ご意見をいただければと思います。

（大場委員）

前回の議論に目を通してきまして，改めて今日これを見てコメントを述べます。

共生・創造については，概ね問題ないと思います。自立についてですが，継続的に学び続けるということはいいと思います。その次の変化する社会にあって自分ができることを主体的に判断して行動することができる人というところに，「学びを活かす」というようなところが後者のところにあるといいなと考えました。単に学ぶだけで終わらないように。

（田中会長）

活かされないで終わらないようにということですね。

（大場委員）

「学びを活かす」というニュアンスを，学びを活かして変化する社会に対応するという

ような流れにするとすっきりいくと感じました。この３つはそんな感じですが，上のところで１点，私として引っかかる部分を申しますと，人工知能やビッグデータ等の技術革新の進展と書かれていますが，ビッグデータは技術革新ではないと思っていて，ビッグデータの活用とか，ビッグデータ解析とか，そのような感じだと思います。もしくは，ＩｏＴなどが適しているというところです。

（田中会長）
　ありがとうございました。そうしましたら，ビッグデータ等とありますけれども，活用にさせていただければ。等の前に活用を入れると，問題ないということでございますね。いかがでしょうか。齊藤委員，いかがでしょうか。

（齊藤委員）
　活用でよろしいかと思います。

（田中会長）
　活用と入れると，全く問題ないということでございますね。

（大場委員）
　今，ネットで調べましたが，それで問題ないと思います。

（田中会長）
　これで１１行目のところ，これはＯＫですね。それから，ちょっと重い提案がありましたね。２０行目のところですね。変化する社会にあって自分ができることを主体的に判断して行動することができる人を育む，ご意見の趣旨は，静止的であって，変化する社会に対応できる人というのは，変化を感じたときに自らが変化してそれに適応して，そこでまた学ぶということでしょうか。

（大場委員）
　それもあるかと思うんですが，変化する社会での課題を発見して，それを自分が持っている学んだ知識を活かして，対応するということ。ちょっと長くなってしまいますけれども。

（田中会長）
　自分ができることを主体的に判断して，たしかにそのとおりなんですけど，ちょっと静

止的な気がしていて。自分ができないことにもチャレンジするという，自分ができないけど背伸びをして学習して，新しい力を身に付けて，そこで頑張るというのが，ちょっと未来的な人間像になりますよね。大場委員，そういうことですよね。

（大場委員）
　それも含めてあると思います。ちょっと私としては，学び続けてというのを受けて，学びを活かしてとかいう言葉を入れると，活かして主体的に判断，判断・行動する。「自分ができること」というと，やはり狭めている感じがします。

（田中会長）
　できることしかやらないような感じになりますよね。ここを変更しましょうか。

（大場委員）
　少し改善すると，広がる気がします。

（田中会長）
　いかがでしょうか。絹野委員，いかがですか。

（絹野委員）
　変化する社会にあっても自分の学びを活かしてというと，滑らかになるかと。「自分ができること」というと，何か野暮ったいような表現になっているので。原案をつくるのも大変ご苦労されて提案されているということで，感謝しているんですけれども，今の先生のお話を活かすとすれば，「変化する社会にあっても自分の学びを活かして」というと，ある程度滑らかになると思います。

（田中会長）
　それで，主体的に判断して行動するに繋げるということですね。

（絹野委員）
　そうですね。はい。

（田中会長）
　いかがでしょうか。よろしゅうございますか。井上委員いかがですか。

（井上委員）
はい。今の意見を聞いて，そうだと思います。

（田中会長）
竹内委員，いかがですか。

（竹内委員）
前回の会議で，何かそういうお話が出たような記憶があるんですが，学びを活かしきれない人もいるというような，それでこういう表現になったという記憶がありました。今の大場委員のおっしゃることでいいと思うんですけれども，自ら主体的に学びの部分を活かしていかないっていう方もいらっしゃるんじゃないか，そのような発言が出たような気が。

（田中会長）
それは，おそらく，自立のところで学びのスタイルをいろいろ議論しましたよね。そこに関わって出てきたことかもしれません。

（大場委員）
「自主的に」という言葉が強いとか，あったかと思いますが。

（田中会長）
「自主的に」ですね。

（大場委員）
「自主的に」という言葉が，これに変わったのではないかと想像したんですけれども。

（竹内委員）
そうですね，自分の学びを活かしてということだと，できることというよりももっと積極的なイメージになって，私もよろしいと思います。

（田中課長）
「学びを活かして」だから，そこで学んでもいいし，過去に学んだ成果をそのまま活かしても構わないということですよね。ですから，その両方を含むような形になる。中島委員いかがですか。

（中島委員）
　そのとおりでよろしいと思います。

（田中委員）
　山田委員，いかがですか。

（山田委員）
　私もいいと思います。前の方に，主体的っていう言葉がありますからね。主体的・対話的な深い学びのスタイルが身についていれば，当然，主体的に判断して行動する，ということになると思いますので，そういう意味では，学びを活かすという表現の方がしっくりするのかなと思います。

（田中会長）
　ありがとうございました。皆さんにご意見頂戴しました。共生・創造はものすごくすっきりとした素晴らしい文章で，短く簡潔にまとまっているなという気がしました。特に，創造の２９行目の「函館への愛着や誇りを強く抱きながら」。押しつけがましくない書き方だと思うんですよね。函館愛と言うと，非常に固定的に見えますけれども，様々なレベルで愛着という，幅のある，しかも深みがあるような気がしますね。誇りもあるということですから。この共生・創造のところでご意見ございますでしょうか。皆さんからいただきたいと思います。
　世界に目を向け，これもいいですよね，すごく。
　それでは，ここは先に進んで何か引っかかるようなところがあれば，また原点に戻るということもできますので，これで固めて先に進めてまいりたいと思います。よろしいでしょうか。（各委員から「はい。」の声）ありがとうございました。
　人間像，議論してまいりましたが，今後の骨子，それから素案ができてくるときに，微調整もあり得るということで，その際は，随時，協議することも構わないと思います。
　そこで，資料３の方にまいりたいと思います。事務局から提案がございました，今日のポイントがございます。基本的視点が３つ，そして基本目標でございます。
　それでは，基本的視点からまいります。基本的視点からを見てから，基本目標について議論を進めていきたいと思います。
　まちづくりを支える人材育成の視点，教育における多様性の尊重の視点，縦の接続，横の連携・協働の視点，その他に何か別な観点などが必要であれば，お受けしたいと思います。考える上で参考となるのが，前回の意見となると思います。そちらもご覧いただくこ

とで，基本目標の議論の役にも立つかと思います。ちょっとご覧になっていただく時間をいただきたいと思います。５分くらい時間を取らせてください。十分資料に目を通していただきたいと思います。

≪検討時間：５分≫

（田中会長）

それでは，よろしいでしょうか。議論を始めさせていただきたいと思います。

基本的視点の見方でございます。３つございます。私の認識を申し上げますと，まちづくりを支える人材育成の視点，これは，まちという我々が住んでいる地域そのもの，地域の方からみた視点だと思います。それから，２番目のところ，教育における多様性の尊重の視点，これは一人ひとりの市民が，あるいは子どもが学んでいくときの学ぶ権利といいますか，ひとつの独立した人格としての教育を受ける自由が発揮できるという個から見ている視点かなと思います。それから，３つ目は，その個と社会がうまく教育される，あるいは，まちとして発展できる，そのための関係のあり方ですね，協調すべき関係のあり方，組織の関係のあり方，こういったものを関係性の概念といいますが，そういったものがあると思います。ですから，３つ目の視点だけは少し異質なものかもしれません。そのような３つのカテゴリーがあります。ここにもし補うべきもの，強調すべきものがございましたら，入れさせていただくことも構わないと思います。というのは，この３つの視点は，基本目標とか施策の方向を眺めるときに，必ず１回はこのフィルターを通して我々点検していくということになるからです。いかがでしょうか。ご意見あればお願いいたします。絹野委員，どうぞ。

（絹野委員）

縦の接続，横の連携・協働の視点，これは少し抽象的で，今，会長の説明があったから中身が理解できたのだけれども，初めて見る人にとっては，縦の接続とは何だろうと，そう思われるのではないかと思いますね。以前の議論で，この縦の接続，横の連携・協働の視点の部分については，成長・自立・創造という縦の視点だと，話し合いした中では。成長・自立・創造という縦の接続と連携・協働という横の視点となると，より具体的だと思う。これは話し合いした中身ですけれども，そういう中身を具体的にするといいのではないか。この表現の縦の接続であれば，何をもって縦の接続と言っているのか，わからないですよ，初めて見た人は。上の２つは具体的で，ある程度読んだ人にも意図が伝わるわけですけれども，最後の部分は，より具体的にしないと初めて見る人にわかってもらえない。抽象的すぎると私は感じますが，いかがですか。

（田中会長）
成長・自立・創造を加えると，より一層明確になるということですね。

（絹野委員）
子どものいわゆる成長，それから自立，創造ですよね。これは，縦のそういう部分と，仲間の連携だとか協働という横の接続。これがうまく視点で絡みあうと，より成長が見えるという，そういう具体的な文章に表現になっていくのではないかなと私は思いますけれども。いかがでしょうか。

（田中会長）
いかがでしょうか。

（絹野委員）
以前に話し合いしているんですよね。ここのところはね。

（田中会長）
育ちのプロセス。ですから，成長というのは子どもとして生物学的に育っていくということになるし，それから，自立ということは，人間的な自立，さらに創造っていうのは，社会でいろんな役割を見出して果たしていくという，そういうことですよね。ですから，縦というものの概念がそういうものだと。成長・自立・創造という縦の接続。こういったところを加えていく。その方が明確化するかと思いますが。いかがでしょうか。山田委員，どうぞ。

（山田委員）
たしかにその方が非常にわかりやすくなると思っております。ただ，前回の協議会では，視点が２つ，資質・能力の視点と環境の視点とありましたけれども，今，これが３つになっているというところで，その根拠といいますか，ここが３点になった辺りを教えていただければと思います。

（田中会長）
資質・能力と環境の視点，ここのところがどこにきているのかというご指摘です。

（事務局）
　この基本的視点につきましては，議論を始めた第１回目で，これからの教育振興基本計画を立てるにあたって，事務局はこの視点で話し合いをもっていただきたいというのが，そもそものスタートだったものですから，そのときの縦，それから横の説明は，縦は，幼稚園から大人までという接続，それぞれのステージには学校もあるし，幼稚園もあるし，保育所もあるし，それから家庭，地域があるという横，企業もあるだろうというところの縦と横というイメージでスタートさせていただいたんですけれども，議論の中でこの縦の意味づけというのは，今，絹野委員がおっしゃったとおり，いろいろと変化してきているということは確かにそれぞれの委員の皆様にあるのかなと思っていましたけれども，事務局としては，そういうふうに捉えていたものですから，小さい頃から大人までの小・中・高・大の連携ですね，そして社会とのつながり，ということで捉えておりました。それぞれの委員の皆様の中で，いろいろと発想が広がってきておりますので，またその辺もご意見いただければと思います。

（田中会長）
　そうですね。

（山田委員）
　わかりました。事務局のお話でもその縦・横のお話は，前回かその前にも出ていましたから，そういう辺りが強く強調されているのかなと感じておりました。わかりました。

（田中会長）
　というのは，縦の視点というのは，学校教育のイメージですよね。横の視点といったら，社会教育的なイメージですよね。そういった２つの側面というか，関係を捉えるといった感じになるのでしょうか。

（事務局）
　ええ，そうですね。社会とのつながりというのもありますけれども。縦においては。

（田中会長）
　ちょっと，ここは保留にしましょう。

（事務局）
　ええ，そうですね。

（田中会長）
　それでは，基本目標に移りたいと思います。こちらは，学校教育と生涯学習に分かれております。これまで私どもの議論は，前回の協議のように，人間像を実現するために必要となるものを，自立・共生・創造という３つの観点からやってきましたし，資質・能力の視点と環境の視点，つまりは，人間の能力というのは，資質・能力という潜在的なものとその周りの環境という２つの面から，内と外から見る必要があるということで，表のようなマトリックスで議論してきました。今回，この基本目標では，枝分かれして分かれているわけですね。これはカスケードといいますが，カスケードに落としていくと，縦・横の２つの結びつきがあったものが，バラバラになってしまう危惧もあるわけです。ですから，バラバラになっていないということをどう保障するかという問題があるかと思います。そこで，基本目標の１から７まで，どうしましょうか。学校教育，生涯学習，相互に関係しているものですし，それぞれのものも相互に関係しているものだと思います。横に施策の事例が出ておりますので，そこでイメージしながら，この基本目標に過不足はないか，こういう割り方でいいのかどうか，もっと強調すべきものは必要ではないのかどうか，そこについてご意見をいただきたいと思うわけです。いかがでしょうか。どなたからでも結構です。

（大場委員）
　今，会長が言われたとおり，マトリックスの形になっていないので。例えばカスケードの形で表になっていると重なりとか漏れとかが出やすいんですけど。要は基本的視点の３項目に対して，基本目標がどう関係しているのかがわかると，ここが抜けているねと言えるのですが。今，バラバラと見てみると，見づらいですよね。

（田中会長）
　バラバラ感が出てくるんですよね。こういうカスケードにすると。

（大場委員）
　マトリックスにした方が漏れを洗い出しやすいんですけど，そういう感じの表みたいな，マトリックスをつくることはできますか。

（田中会長）
　事務局，どうぞ。

（事務局　木村学校教育部長）

非常にここは事務局内でも苦労したところなんです。当初は，自立に対して基本的方向性ということで，自立はこれ，自立を促すための施策はこれ，と１本つくっていました。共生も，創造もそれぞれ１本，これでやっていきましたら無理が生じてきたものですから，こういう形で学校教育，それから生涯学習の視点から組み直しをしました。

基本的に１番の生きる力の育成っていうのは，要は学校教育の根幹になる部分，これが一番の基礎。それと函館の特色を出そうということで，２番目です。３番目は，今，これから函館市が，国もそうなんですけれども，コミュニティ・スクールという視点で，地域とともに地域にある学校，そこを意識しての方向性。そして４番の学びのセーフティネット。すべての子どもたちが学ぶ環境，それを行政として保障していくという視点。大きくまとめたのは学校教育で，それで生涯学習の方は，教育大綱というものが策定されておりますので，それに則った文言，生涯学習，文化芸術，スポーツ振興という窓口から方向性を出したということです。

マトリックス，どういう形でできるか，事務局でちょっとお時間をいただいて，それを後ほど何らかの形で資料配付させていただくということはさせていただきたいと思いますけれども，基本的にはこのような形で学校教育は４つ，もっとたくさんあったんですけど，それをまとめてここに絞ったというのが現状です。

（大場委員）

今の説明で，どちらかと言うとトップダウンな感じで，こういうのが出てきたっていうのは何となくわかりました。そこで，自立・共生・創造というものを掲げているわけですが，それぞれに１から７のところに，自立・共生・創造の１つなのか２つが，どこに入り込んでいるのかというのを丸みたいな印を付けると，もう少し関係性が見えるのかなと感じました。

（田中会長）

何か要素ですね。下に関係する概念，要素を入れると。そうするといいですね。

（大場委員）

そうするとやりやすいですね。だから２つ丸がつくものがあれば，全部付くのもあるし，１つだけとか。

（田中会長）

いいですね。自立・共生・創造，いずれも関係していますけれどもね。強弱があるかと

いうふうに思いますけれども。

（大場委員）
　それは，例えば二重丸とか，一重とかいうふうにやると。自立・共生・創造の軸がちゃんと関係している，関係性がわかる。

（田中会長）
　それから，資質・能力とか環境の視点も，これも同じくベクトルとしてはそこに入れることができますよね。ですから，５つのファクターを要素として，そこでどういうふうに関係しているか。例えば，セーフティネットになると，環境というところに非常に重きが出てくるはずですよね。そういうどちらに軸足があるのかということがわかるような形で，記載していただくと。少しその工夫があると，この項目が生きてくるという感じがしますね。別概念ではなくて，それぞれの政策的なものの分類なんだと思います。例えば，１番のところは，学校教育の学力あるいは今言われているコンピテンシーのような能力育成ですよね。２番のところは，どちらかと言えばキャリア教育的ですよね。進路指導とか。３番のところは社会的な，コミュニティというか，学校づくりの視点ですね。学校組織をどう作るかという問題。４番目は子どもの貧困という問題がありますので，教育の機会均等をどう現代的な問題として保障していくか，こういうことですよね。だから，それぞれのジャンルが政策的に領域としてはあると。むしろ，そういう大きなキーワードで，教育のいろんなジャンルや関係する概念もちょっと関係するものとしてそこに例示していただけるとイメージしやすいのかなという気がします。
　では，今，学校教育を議論してまいりましたけれども，生涯学習はいかがですか。同じ視点で処理することはできますでしょうか。

（山田委員）
　いいですか。

（田中会長）
　どうぞ。

（山田委員）
　学校教育の４番にあるセーフティネットという言葉に，何か少し違和感があるというか，右の方の施策の方を見ますと，教育の機会確保のための支援ですとか，教育環境の整備ということがあるんですけれども，セーフティネットという言葉に非常にネガティブな

イメージを持っているのは私だけかなと思ったのですけれども，学びを支えるということで言えば，学校教育もそうですけれども，生涯学習，両方に関わるのではないかなということで感じておりました。ここのところ，セーフティネットという言葉もいいのでしょうけれども，学びの支援ですとか，環境の整備とか，そういう感じかなと私は思っていたところなんです。ご意見を聞かせていただければと思います。

（田中会長）
大場委員，どうぞ。

（大場委員）
学びのセーフティネットというところは，どちらかと言えば，こういう独立したものではなく，ベースとして，環境として用意しなければいけないという必然みたいなところで，独立じゃなくてそれぞれに関係してくるのかなと思いました。

（田中会長）
学校教育だけではないということですね。

（大場委員）
はい。ベーシックなところでこれを必ず整えてあげる必要があると思います。

（山田委員）
私も，そういうイメージなんですよ。だから，函館は教育全般を支えるよ，っていう強いメッセージというのかな。

（大場委員）
これは大前提みたいなところで，それぞれを進めていくのはどうですかね。そうすると，学校教育３本，生涯学習３本になる。

（田中会長）
並びとしてはいいですよね。

（大場委員）
セーフティネットとしては両方に。ベースで。

（田中会長）
別のジャンルとして捉えるということですね。

（大場委員）
ベースとしてある。共通であるという感じですかね。

（田中会長）
別枠としてあるということですね。

（大場委員）
下支えするもの。

（田中会長）
基盤として。基盤的な。

（大場委員）
そうですね。基盤。基盤的な。

（田中会長）
だから，学校教育もしくは生涯学習，両方にかからなければいけないということですね。
生涯学習でこういう教育の機会均等というサービスを提供するという政策，今ございますか。ないと，事務局も困るということになるかと思います。

（事務局）
教育機会確保法が昨年度法律でできまして，函館市とすれば，南北海道教育センターでやっている，やすらぎ教室ですとか，不登校の対策が主に中心になってくるんです。あとは，民間ですとフリースクールですとかが設けられておりますので，函館市としましても，こうしたセンターを使っての事業等がございますので，そういった意味では，教育機会の確保というのは，学校になかなか行くことができなかったり，いろんな事情で，そういった部分についてセーフティネットを張っていこうという施策の方向になると思います。

（田中会長）
問題ないということですね。基本的にはあまり問題ないですよね。

（事務局）
そう考えております。

（田中会長）
わかりました。非常に重要な意見を頂戴しました。ありがとうございます。それでは，この言葉，基本目標の７項目あるんですけれども，セーフティネットという言葉そのものの違和感がないだろうかということですけれども，ご意見を頂戴したいと思います。齊藤委員，いかがですか。

（齊藤委員）
私も同じように，セーフティネットというところに違和感がありました。田中会長がおっしゃったように，例えば，「子どもの貧困」ということを捉えた時にも，これを学校教育だけでなく，「安心して学習できる経済的環境を整備する」という地域の課題としてもとらえる必要があると思います。
また，生涯学習の方に，健やかな心身を育むスポーツの振興とありますけれども，健やかな心身を育むものは，スポーツだけでなく「食」が欠かせません。そしてまちづくりの視点からも，「食」については，函館の中の特徴的な部分であると私自身は捉えていて，「食育」という文言が明文化されればよいと考えていました。今，函館でも「子ども食堂」などがあり，それがどういう所管になるのかなども考えますが，スポーツであっても芸術文化であっても，環境整備において学校教育と生涯教育はつながっていくと考えます。
そして，少し話が戻るのですけれども，先ほどの基本的視点のところで，人は資料を横に見ていくものですから，基本的視点の１番のまちづくりの視点と，３番の縦の接続の視点の順番が入れ替わっていたとしたら，横にスライドしていきながら，視点も見えつつ，つながっていくかもしれないと感じました。

（田中会長）
もし，具体的に１つ例示するとしたら，どういうつながりになりますか。ちょっと僕，即座に理解することができなかったのですけれども。

（齊藤委員）

人間像の自立・共生・創造は，すごく中身も整理されていてよくわかります。ですからそれに続く項目はそれで基本的視点のフィルターを通していくものだと考えたときに，ある程度，人間像に準じたものであるべきだと思います。そこで，３本の人間像に沿った視点で，基本目標も一本化にはならないにしても，先ほどおっしゃったような「要素」という形で，これとこれが入るという形になると，誰が見てもよく分かると思いました。

それと，昨日資料をいただいたときに，目を通したときの感想なのですけれども，「函館らしい」ところは，学校教育の２番の「函館の愛着」，人間像であれば「創造」，そして施策の方向であれば２つ目の部分だと思いましたが，全体の書き方を見た時にもう少し函館らしさがあると，より創造的になっていくのかなというふうに思いました。

（田中会長）

函館らしさですね。どう出すかという問題ですね。

今，セーフティネットの問題と関わって，函館らしさをどこで読み取れるようになっているのかという別なご見解も頂戴しました。セーフティネット，この言葉はちょっとこのままではいけないかなという気がするんですが。事務局いかがですか。

（事務局）

私どももセーフティネットという言葉は理解できるだろうか，もっと違う言葉がないだろうかといろいろ議論しました。国でもセーフティネットという言葉を使っています。

一方で，教育委員会事務局が策定する基本計画であるということで，子育てという視点もあるにはあるのですが，そうなりますと子ども未来部という別の部局がございまして，そちらとの連携を図りながら，本来であればこのような基本計画を立てていけば一番，齊藤委員がおっしゃったように，すべてを包含できることになるのですけれども，なかなかそこまで行ききれていないという現実が正直あるものですから，非常に狭義のセーフティネット，不登校対策もそうですし，安全・安心ということで通学路の確保とか，耐震も含めて，そして就学援助という側面もございますが，そういったようなことが実はあって，議論はあったのですが，そのまま載せているということです。たしかに，子ども未来部の子育てのことも含めると，このセーフティネットという言葉をここに入れると勘違いされるだろうという危惧は持っていました。

（田中会長）

他の委員からご意見頂戴したいと思いますけれども，中島委員お願いします。

（中島委員）
今の学びのセーフティネットの話でございますけれども，今，様々な面で社会問題化しています。例えば，いじめの問題，育児放棄の問題，あるいは赤ちゃんポストですか，これまで１２０人くらいの命が救われたですとか，いろんな面での危機にさらされている子どもたちに救いの手を差し伸べるという面は，施策としても講じていただく必要があると思うんですよね。それをどういう形でとりあげるか。市の教育施策で，いろんな貧困の問題もありますし，非常に複雑な家庭環境，また，自立支援ホームで生活している子も定時制の生徒に今結構いるんですよね。そういう子どもたちにどうやって社会として，子どもたちが社会に出られるような手立てを講じてあげられるかということも考えておく必要があるのかなと思います。私は見ていてそんなふうに思います。実際に児童養護施設から来て，定時制に入って，定時制で働きながら通っている子もいます。また，家庭環境で保護者が養育義務を放棄しているような子どもたちもいますから，そういったなかなか光が当てられていない部分の子どもたちをどこかで救う手立てというのは，セーフティネットという考え方も大事なのかなと思います。直接，こういう項目として載せるかどうかは別として，そういうのは必ずベースとしてどこかになければいけないことじゃないかなと思います。

（田中会長）
貧困の連鎖という問題がありますよね。ですから，連鎖は断ち切るものだと。セーフティネットという言葉，私は齊藤委員と同じようにちょっとネガティブな感じがするんです。欠落しているところを補うというような非常に消極的な感じがするんですね。そうではなくて，教育は未来への投資と言っていますよね，国連はそういうふうに言っていますから，特に幼児教育，初等教育は未来への投資であると言っていますから，むしろ積極的にセーフティネットどころか，そこに厚く盛っていくという，総じて全部基盤を上げていくという概念が必要なんだろうと思います。セーフティネットとは，マイナスをゼロにするというそんな感じが僕はしているものですから，あまり積極的には捉えることはできないと思うんですよね。大場委員，何かよい言葉はないでしょうか。

（大場委員）
私も，セーフティネットがピンと来なくてですね，今ちょっと探しているんですけれども，難しいですね。安全・安心というのと，機会均等ということですかね。

（田中会長）
機会均等。実質的な意味ですよね。今は実質化していませんからね。機会均等と言われ

ていても。実質的な平等な学びということが保障されていないですよね。だから，平等を実質化するということなんだと思いますよね。義務教育で無償と言っても，実質的に無償ではないわけですから，いろんなお金がかかるわけですよね。そういう意味で，なかなか均等になりきれない，そこを実質的に均等にする。事務局にまたお願いして，いい言葉を考えてもらうしかないと思いますけれども，我々のセーフティネットという言葉に関する見解は，少しこれは変えた方がいいだろうということだと思いますね。概念としては，実質的な平等を保障する，学びの権利を実質的に保障する，つまりは，そういうことでよろしいでしょうかね。

（山田委員）

ここの文言のベースにあるのは，課題を抱える家庭の子どもという考えがございますよね。先ほどの事務局からのお話の中でもあったのですけれども，私もこれを初めて見たときに一番思ったのは，やすらぎ学級だとか，不登校対策のセンターでやっている事業，非常に狭義であるのだけれども。そうではなくて，もっと広い意味での学びの支援，環境整備といったところが盛り込まれてはどうだろうというのが私の意見です。

（事務局）

ご意見を伺っていて，私どもの狭義のセーフティネットでは世間では通用しないということを理解しました。セーフティネットという言葉になると，やはり広く捉えられるということですので，この辺，また事務局で持ち帰らせていただきたいと思います。

教育委員会だけでは書き切れない施策というのも出てきますので，その辺になると，子ども未来部との協議とか，あるいは参考として他部局で行っている施策を挙げていくというようなこととか，書き方はいろいろ工夫できると思いますので，持ち帰らせていただきたいなと思います。

（田中会長）

この４番の学びのセーフティネットの充実とございますけれども，ここは別の枠になる，一番下がいいのかなというふうに思いますので，そこもご検討をお願いしたいと思います。その他，基本目標についてご意見を頂戴したいと思いますが，竹内委員，いかがですか。

（竹内委員）

言葉のつながりについては委員の皆様がおっしゃるとおり，もう少しつながりがわかるように，というのは思ったのですけれども，一つひとつの文言自体は，セーフティネット

以外の部分は言葉自体よろしいんじゃないかというふうに思っていました。具体的に，２番目の函館の愛着や誇りと未来へ飛躍する力の育成ということで，齊藤委員がおっしゃっていた部分でここが函館らしいというところを生かしていただくのに，郷土愛が生まれていくプロセスといいますか，右側の施策の例示のところでもう少しわかるように表現していってはどうだろうかと思っていました。すぐ見て気づいたところは，そんなところでございます。

（田中会長）
ありがとうございました。井上委員，いかがですか。

（井上委員）
３番の地域とともにある学校づくりの推進というところで，この部分は，参考資料の環境の視点というのが関わってくるのかなと思ったのですけれども，前回の協議会の「自立」の「環境の視点」の部分で，すべての環境の視点で，地域の大人力であったりという部分があるのですけれども，大人力というのは具体的にどういうことかなと。書かれているだけでは，人間力，大人力といろんな言葉がよく使われますけれども，地域の大人力とはどういうことかなというところをもう少し具体的に書いたほうがわかりやすいと思います。

（田中会長）
前回の協議会での意見ですね。ＰＴＡなどの学校を見守る，支える，そういった力なのではないでしょうか。
地域とともにある，「ともにある」というところも含蓄がありますが，「ともにある」というところが不明確だとかいうご指摘がありましたら，議論できるかと思います。
ところで，コミュニティ・スクール，今，これはどんな感じでイメージされているのでしょうか。函館市の今の現状はいかがですか。

（事務局）
昨年度開校した五稜郭中学校をまず第１号として指定しています。今後ですけれども，今年度にある程度準備をして，来年度から指定する学校，具体的に言いますと，統合が決まっている学校とか，そういうところは比較的準備がしやすいのかなと思っています。
いずれにしても，コミュニティ・スクールは，国でも次期学習指導要領の基盤になるということを言われておりますので，遅くても，３１年度である程度，個別の事情でどうしてもできないというところも出るかもしれませんけれども，基本的にはそういう形で進め

ていきたいと思っています。そのため，今年度，研修会などを開いて，コミュニティ・スクールの函館市としてのイメージを共有するとか，そのような取り組みを進めていきたいと考えております。

（田中会長）
　これは，従来の学校とどう違うのかと言われたときに，端的に言うと，どういったところが違うのでしょうか。

（事務局）
　学校経営方針に対する意見をいただくというところが一番大きなところだと思います。
　学校経営に地域住民が参画できるというところが一番大きいところです。
　もっと，具体のイメージを申しますと，例えば五稜郭中学校では，もちろんそういうような学校経営方針いかがですかというご意見をいただくという場面もありますし，地域の人材を活用するというときにもコミュニティ・スクールということで，地域にある学校ですから，今まではなかなか人探しというのは，学校，教頭，校長が中心となって人探ししていたものが，今度は，コミュニティ・スクールですから，そういう人材バンク的なことがなされるとなると，例えば，そこにコーディネーターがいたとしたら，コーディネーターが企業とつないだりとか人材を確保したりとか，そういうことで今まですべて学校が窓口となっていたものを今度は地域が受ける，地域が考えていく，そこが一番コミュニティ・スクールの大きな違いかなと思います。学校だけでは抱えきれないくらいの様々な教育に関わる課題とかが来ていますよ，ですから地域みんなで子どもを支えましょうというのが狙いなのです。

（田中会長）
　つまりは，学校経営方針の策定，それから教育活動に地域住民が参画すると，それから，学校の教育サービスを地域住民も受ける，子どもだけでなくて大人もいろいろなサービスを受けられるように，というその両面ですね。

（事務局）
　そうですね。それが一気に花開いてすべて用意ドンで行くことは考えにくいですが，そのような基本的な考え方が浸透していくと，自然と会長がお話された形に近づいていくと思います。それを目指しています。

（田中会長）
　地域とともに，という意味は，地域に支えられ，地域を逆に支援する，学校が支援する場面もあるということですね。支え合うという相互作用であるということですね。了解いたしました。
　それでは，あと１０分くらいになりました。今日は施策のところまで踏み込むことはできませんが，本日ここでご了解をいただけましたら，今の２点，セーフティネットを然るべき文言に変えていただくということと，この枠組みを一番下の生涯学習と学校教育以外の別枠で基盤的なものとして捉えるように構造を変えていただく，この２点だけを確認させていただきたいと思います。
　あとは，絹野委員いかがですか。もしこの中で何かございましたら。

（絹野委員）
　今までのお話でいいのかなと私は思いますけれどもね。

（田中会長）
　よろしゅうございますか。

（絹野委員）
　ええ。

（田中会長）
　大場委員，いかがですか。

（大場委員）
　結構だと思います。特にありません。

（田中会長）
　齊藤委員は，よろしゅうございますか。

（齊藤委員）
　たまたま一昨日，局の方がみえて，これからの幼児教育の推進・国の幼児教育の推進のお話をされたときに，幼児の教育の施策に力を入れて取り組んだところは学力が向上しているということで，秋田県と福井県の成功例をお話されていました。これから函館は人口の流出を防いで，とにかく人を減らさないようにしていかなければならず，子どもをきち

んと育てていくことを真剣に考えていかなければならない。そのときに，幼児教育の推進を盛り込むことが必要です。具体的な文言が言えなくて申し訳ないのですけれども，幼児教育の推進を明文化し，そこに力を入れて根本的に取り組んでいく。それは先行事例と同じように，学力向上につながっていき，それから函館の活性化につながっていく。３０年後を見据えたところの計画が今ここにあるわけですから本当に難しいのですが，必要なことだと思います。

（田中会長）
学びのセーフティネットに留まらず，我々，環境ということをかなり議論してまいりましたのでね，未来の投資としての基礎教育，幼児教育ですね，そういう初等教育，幼児教育の基盤づくりといいますかね，そこを固めるということが一番下のところにということでございますが，そこのところをどういうふうに設計するか。

（齊藤委員）
そこのところは，先ほどの話に戻るのですけれども，幼稚園という括りでは駄目なんですよね。今であれば，幼稚園，保育所，認定こども園のどこでも，幼児教育に関しては同じ考え方にあります。ここは文部科学省だ，ここは厚生労働省だと分けにくく，内閣府で一元的に幼児教育を行おうとする動きに基づいて進めていこうとしていますから，函館市においても，ここを分断せず，これからを見据えて，今ちょうど計画を作るところなのですから，所管の連携を深めてやっていければいいなと考えていました。

（田中会長）
生活の問題も，貧困の問題も，経済の問題もありますから。

（齊藤委員）
やはり，家庭の教育環境の整備がベースにないと，いくら学校教育だけを考えていっても進まないと思えてくる。ですから，市役所さんでも，それぞれポジションがあって難しいかと思いますが，連携が大切ですよね。

（大場委員）
おそらく，子どもに留まらずに，家庭が関係してきて，特に母親，両親の家庭環境が大きく響いているんじゃないかなと想像するんですよね。お母さんの支援のようなところまで，このセーフティネットの部分に入ってくればいいかなと，漠然と思うところですね。

（田中会長）
　教育が成立する基盤づくり，ここのところですよね。教育が成立するということですよね。貧困だと教育は成立しないわけですから。

（大場委員）
　まず生活が優先されるので。いかに日々を生きていくかということから，子どもへの教育ということを考えられる母親の環境をつくる。

（田中会長）
　家庭や家族が成立していないと，教育の成立する基盤がないということですよね。

（大場委員）
　そこが盛り込めるといいかなと今聞いていて思いました。

（田中会長）
　そこは，少々言葉に工夫をいただきたいなと思います。
　その他，ご意見いかがでしょうか。

（山田委員）
　今，考えていたのですけれども，バランスを取るということを考えれば，上の方の４番を考えれば，幼小中高，子育て家庭というお話もありましたけれども，学校教育ということに限って，下の方では，生涯学習に関わっての環境整備ですとか，学びの場の充実という部分を入れていけば，大場委員のお話にもありましたけれど，３対３，４対４でバランスとれるのかなと。この表の中で，基盤とするという表現をするのは，非常に難しいと思うんです。これが縦のものであって，基盤があって，その上にあってということであれば書きやすいと思うんですけれども，表現しづらいので。

（田中会長）
　枝分かれしてしまっていますからね。

（山田委員）
　と思って，今，考えておりました。

（絹野委員）
今，山田委員が言ったように，２つの学校教育と生涯学習の下にベースに置くというのは，構造からすると非常に難しいですよね。セッティングするのが。これをまたガラッと変えてしまうのであれば別ですけれども。

（山田委員）
大変ですね，それは。それでバランスを取るのに，少し考えていたんです。

（田中会長）
４つ，４つにするということですね。

（山田委員）
はい。

（田中会長）
それも１つの，学校教育と生涯学習を相対的に切り分けるという形ですよね。
市役所システムはそうなっていますから，その方が理解しやすいかもしれませんね。
ちょっとそれも検討していただきたいと思います。４・４でいくか，３・３・１でいくかという感じになるかと思いますけれども，そうしたところで本日はよろしいでしょうか。
いろいろご意見を頂戴いたしました。それでは，本日の議事は基本目標のご意見を頂戴したということで，次回また修正提案をしていただくということ，それから，施策の方向の例示もですね，ここも次回検討することとなるかと思いますので，ご準備もお願いしたいと思います。以上で本日の議事を終了したいと思いますが，事務局から何かございますか。

（２）その他

（事務局）
次回の第２回協議会の開催につきましては，６月１日木曜日を予定しております。
ご多用のところと存じますが，ご出席よろしくお願いいたします。

（田中会長）
それでは，今日の議事はこれで終了としたいと思います。

3 閉 会